

動機理論の発達の再構成 (I)

馬場道夫

前回、動機理論の基本的、生理的な部分について述べてきたが、これらの基本的な概念、理論がそのままの形で人間行動を説明できるとは考えられない。それは、動機づけが、生理的、生得なものであるだけでなく、心理的、獲得的なものと考えられているためである。いわゆる動機づけは、目標が定められており、それに対して努力している状態である。この目標が定められるということ自体が、既に経験と学習を要する過程なのである。このために、人間、特に成人の動機理論を再構成するためには、動機づけの獲得についての明確な知識と理論がなければならない。そこで今回は、動機づけの獲得についての問題を取りあげた。

Ⅲ 動機 の 獲 得

動機づけの獲得については、色々な立場から分析され、論じられている。学習理論によるものを初めとし、神経生理的な説明、性格心理学的な分析などがある。我々は前回に引続いて、動機づけの問題を生理的、基礎的なものから、次第に人間的な水準まで高めて行く方法をとることにする。そこで、まず学習理論からはじめることにする。

(1) 条件づけによる説明 (二次強化)

獲得動機はいわゆる条件づけによって比較的簡単に説明されるようにみえる。ある人間が、他の食物でなく、コーヒーやアイスクリームを欲しがるのは、それらの食品の摂取の経験が、特別な満足 (私の用語によれば、快) を条件づけた結果であると説明できる。しかし、原理的にはなかなか問題が多い。

条件づけや条件反射の研究分野では、まず二次強化の概念が用いられるであろう。二次強化は、光が食物によって条件づけられたとき、次に光が他の音などの刺激を条件づけることができるというものである。光が強化力を持ち、音によって条件反射が形成されると考えられたのであった。しかし、このとき、古典的条件づけと、道具的条件づけでは全く問題が異なってくる。光が食物によって条件づけられて、唾液反応が生ずるとすると、音に対する二次条件づけは、やはり唾液反応となる。いかに高次の条件づけが可能であるとしても、唾液反応しか条件づけられない。これでは、複雑な人間行動を十分説明できない。お金を欲しいと思っても、それが比喩的に使われるのであれば、お金にヨダレをたらすという人はいないであろう。

これに対して、道具的条件づけの立場からいえば、その場合の条件反応は、その場面によつて自由に変化する。餌に向つてある迷路を走ることを覚えたネズミは、他の違った形の迷路の中で、空腹でなくとも、報酬が与えられなくとも、その迷路を学習する。これを Anderson⁽²⁾ は動因の外延化と呼んだ。ポーカーの札についてのチンパンジーを用いての実験は、二次的報酬の研究として、この問題に関しては必ずのべられている。⁽¹⁰⁾ 最終の目標は餌であっても、条件づけられる反応の性質は異なってもよい。二次強化において、ポーカー札のために種々異なった学習を形成することができた。

このようにして、二次強化は、道具的条件づけに限って、多くの動機づけの獲得されているといわれる行動を説明することができると思われる。人間の金銭のための種々の行動、母親父親に対する行動、衣服や装飾品に対する行動も二次強化によって理解できるであろう。直接生得的動機づけによらないものは、二次強化であると説明できるであろう。

ところが、条件づけとその高次の強化によって説明すれば、獲得動因の概念は特に必要ではない。しかしながら、Hull,⁽¹⁹⁾ Miller⁽²¹⁾ の如き S—R 理論の代表者達は、二次動機づけ、学習された動因による説明を採用している。

(2) 条件づけによる二次動機による説明。

これを Hull は比較的単純に認めてしまった。⁽¹⁹⁾ Miller ⁽²¹⁾ の実験を引用した後、彼は次のように定めている。中性的刺激が繰返し、連続して一次又は二次動因の生起と連合され、この動因が急激な減少をみせるとき、それまでの中性刺激は動因刺激を生ずる能力を獲得し、その動因刺激は二次動因又は動機づけの条件となる。要するに、反応が条件づけられるのではなく、動因が条件づけられると考えた。

Olds ⁽²⁵⁾ は、Hull のこのような論に対して反対し、特に潜在学習の結果を重視 ⁽³²⁾ して、Hull の要求減退説の不適切性を指摘した。Olds は、更に、Hebb ⁽¹⁵⁾ 及び Tolman ⁽³³⁾ の説を採用しつつ、独自の報酬理論を考えた。要するに、報酬の作用、特に二次強化は要求減退からは説明できず、積極的な、追求的動機づけが必要であるとした。Hebb 及び Olds については、後に再び述べることにするが、問題は動因の条件づけの外に、誘因の条件づけがあるかどうかということである。つまり、要求減退説によると恐怖の獲得は説明が容易である。ベルによって恐怖が条件づけられたとすると、ベルの音を無くすような反応は強化であるといえる。ところが、食物に対しての場合、迷路の刺激が飢感を生ぜしめ、それがなくなるような反応というものはあるだろうか。それよりもむしろ、餌を食べるときの効果が条件づけられると考えるべきではないか。私の言葉で快の条件づけがあるべきではないか。そうすれば、積極的動機づけの説明は容易になる。

強化それ自体が、動機づけの役割を果すと考える人に Spence, ⁽³⁰⁾ Seward ^(28) 29) がある。Spence の報酬の量を表わす記号 K は動機づけとして働く。Seward は強化から学習、つまり刺激と反応の結合に役立つという意味を除き、動機づけとしての意味のみを与えた。このようにして、迷路の走行のような条件反応には、反応—強化という単純な概念でなく、動機づけの概念が導入されている。それから生ずる二次強化も、二次的動機を生ずると説明される。これは、私の先になした仮説、「快は条件づけることができ、快に対しては接近反応が条件づけられているから、条件づけられた快に対しては接近

反応が生ずる」によって非常によく説明される。

これによって、快・不快の両方について、二次的動機の生ずる理論的根拠が示されたのである。それを一層厳密なものにするために、もう一度動機づけの概念が必要なものかどうか疑ってみることにする。

(3) 動機づけなしの学習

これは生体の行動はすべて生得的なものか、条件づけられたものであると
いえる十分ではないかという問題である。Guthrie⁽¹³⁾ Tolman⁽³³⁾ は S—S 理論
の立場にあるといわれ、学習は刺激と刺激の連合によって生じ、動機づけは
単にそれを促進するものとされるにすぎない。Tolman は後に動機づけに対
する考え方を多少変更したが、Guthrie の場合は動機づけをほとんど問題に
していない。動因は生体に運動を生ぜしめ、報酬はそれを停止させるという
意味でのみ、学習に関与する⁽¹⁷⁾。要するに、学習には刺激の接近が問題であ
り、動機づけは直接的な関係はないというのである。より最近の Estes⁽¹²⁾ の
動機づけによる学習行動の促進の説明も、この同じ立場からなされている。
極めて単純化していえば、条件刺激と無条件刺激の接近が学習を生ずるが、
その際に動因が加われば、刺激の量が多くなり、それだけ抽出され結合され
る刺激も多くなり学習行動が促進されるのであるという。動機づけは単に持
続する内的な刺激にすぎない。空腹で迷路を走るネズミは、迷路の刺激プラス
空腹の刺激が条件刺激となるにすぎない。

この論は、もちろん、学習に対しての動機づけの意味の問題であって、二
次強化や、動機づけの獲得についてのべているものではない。しかし、動因
を単なる刺激としてとりあつかうことにより、動機づけの概念を不用なもの
にしている。

この点を単純に考えると次のようになるであろう。S—R の間に仮りに 10
本の結合があったとしよう。このとき、動因が与えられて、S が 20 になった
としよう、一見 R が二倍になる理由はない。通路の量に変化がないからであ
る。この問題を解決するためには、単位時間当りの刺激数を考えるとよい。

つまり、同時に20の刺激が与えられるのではなく、与えられる速さが異なるとする。この説明は、神経の不応期の限界まで適用することができる。このほか、他の種の刺激の相対的な量も重要である。外的な刺激について、この刺激の増大が反応を促進するということは、Hull によって Stimulus Dynamism⁽¹⁹⁾ としてとりあつかわれている。内的な刺激、動因についても同じとりあつかいが可能であろう。この説明の前提として動因刺激が学習中にその一部でも存在すること、動因刺激の汎化曲線はゆるやかなものであるということが必要である。

潜在学習の実験は、これとは違った意味で、動機づけの不必要性を示している。満腹のネズミが目標箱で餌を「見て」、後に空腹にされたときに、その餌の位置を知っていたことがわかったという実験がある。⁽³²⁾これが二次強化であるという説明は可能であるが、また探索の動機づけによったという説明もできるが、学習には動機づけは不用であるという方向を示す結果でもある。

学習に動機づけがあまり関係がないということは、動機づけの獲得において、動機づけは、他の刺激と特別に異った意味を持たないということである。むしろ動機づけではなく動因刺激が他の刺激と結合されるということにすぎない。

(4) 行動の促進と方向づけとしての動機。

動機づけが、他の刺激、状態と区別されて、特に動機づけといわれたのは、それが他の刺激よりも行動の運動性を増加させたからであった。Guthrie⁽¹⁷⁾もこの点は認めていたと思われる。そこで、行動を促進するために専門化した刺激群を動因と呼んでいいのであろうか。空腹は、むしろ生得的に一般的活動性を増加させるものと考えられていた。この意味では、あらゆる強烈な刺激は、動因となることができる。しかし、動因は方向性を与える根拠をもっていない。これは Brown によって指摘された通りである。⁽⁷⁾⁽⁸⁾あらゆる強烈な刺激が、活動性を増大させたとしても、いつも方向を示すとは限らないで

あろう。

飢の場合を例にとってみても、別に分析したように、⁽⁴⁾生れつき人間や動物が食物や水に向って反応することはできない。飢が食物に対する行動を生ぜしめるためには、食物の刺激と飢の刺激が結合していなければならないであろう。空腹と食物は生活の中で同時に与えられ、結合されると説明されるかもしれないが、このような Guthrie 流の説明は、ここで妥当ではない。もちろんその要因があるとしても、その前に空腹のときに何故食物を食べるのが答えられなければならない。空腹のとき食物を食べるのは、空腹という刺激が食物を食べることにより減少するからであるというのが Hull 流の説明⁽¹⁸⁾である。要求の減退が S—R の強化をなすという彼の根本仮説である。Guthrie の立場からいえば、空腹という刺激が特に食物とのみ結合される根拠はない。もし結合が食物とのみ生ずるならば、空腹という刺激は生得的に食事行動を促進するという仮定が必要とされる。その場合、食物と他の物が区別される必要がある。これは主として、味覚によるであろう。しかも、空腹のとき、味覚が摂取行動を特に促進するのだからなければならない。著者がこのときなした仮説は、⁽⁴⁾空腹は選択的に食物をとることの快を増加するとしたのである。この仮説によれば、Hull の要求減退の仮説は、必ずしも必要とされなくなる。このような方法で空腹と食物の結合が生じ、空腹は食物を求めさせるという結果が生じて来る。これを食物に対する動機と、我々は呼んだのであった。かくして、動機づけの概念は、他の刺激と区別される特殊な役割を持つことが示される。動機づけは活動性と共に行動の方向づけをも決定することができる。

刺激が一般的反応の促進を生ずるという別の説明は、最近注目されている Reticular Formation (網様体) による説明である。⁽⁶⁾それは網様体が非選択的に大脳の興奮を高めることから、推定されるものである。動因も刺激であるために、このことは可能である。しかし、空腹が選択的に食事行動を促進するということは説明できない。網様体は非選択的に大脳の全般的興奮を

高めるとされるからである。

かくして、動機づけは、活動性と共に方向性を決定するという点で他の刺激と異なる特殊な概念となる。他の動機づけの獲得についても同様な説明が可能である。しかし、動機づけの概念の積極的必要性は十分でないように思われる。

(5) 目的追求的行動

条件づけだけでは十分でないということの主張は、全く別の角度からなされている。それは洞察の如き問題である。問題解決の場面は、個体にとって経験の初めてのものである。また、目標追求的行動も、場面が変化し、目標の場所が変化し、既存の習慣のみからは説明できない。猫がネズミを追いかける時は、この典型的な例を示している。これらの変化する行動は、もし条件づけから説明されるとしても、複雑な理論構成を要する。このとき、動機づけの概念が用いられるならば、説明は容易である。著者の定義に従えば、快を生ずるべき誘因（目標）は接近反応を条件づけているとされたからである。そして、移動する目標及びまわり道を要するような場面に対しては、単なる接近だけでなく、持続して目標に達しようとする（快を増大させる）傾向がなければならないであろう。これは快そのものと区別された。類推的にいえば、単なる快の予期だけでなく、快を増大させる努力、快を増大させる具体的行動が必要である。これに動機づけの意味が与えられた。ここに、動機づけの積極的意味を求めることができる。

このような行動が、人間の日常生活を説明し、予測するために必要であることは、容易に推定しうるであろう。洞察や課題解決について述べることは本稿の目的ではないので、ここでは単にその問題を指摘するに留める。

以上、主として動機づけの獲得に重点をおいて述べてきたが、いわゆる二次的動機づけについては十分述べられなかった。ここで、動機づけの形成についての基本的問題が明らかになったので、それらの問題を考慮しつつ、二

次的動機の問題について検討してみよう。

Ⅳ 獲 得 動 機

動機づけは本来獲得されて生ずるのであるから、獲得動機という言葉は意味がないという議論も成立するであろう。ここでは、快を生得的に生ずる刺激に接近し、不快を生得的に生ずる刺激を避ける傾向を生得的動機又は一次性的動機と呼び、条件づけられた快又は不快を生ずる刺激に接近又はそれから回避する傾向を獲得動機と呼んでおこう。動機の獲得の分析からも明らかのように、獲得動因と獲得誘因の問題はかなり異質なものをもっているのので、分けて検討しなければならない。また、動機づけの存否に関する規準を確認しておけば次のようになる。最も厳密な意味での動機の存在は、目標に至る通路や手段の変化にもかかわらず、目標に至る反応が示されることで確認される。

(1) 動因の獲得。

最も良く知られた例は、Miller⁽²⁾の研究である。第1の箱においてネズミに床より電撃が与えられ、隣接する第2の箱へ逃げることを学習させた後に、隣接する箱へ至る通路が閉じられ、第1の箱に閉じこめられる。そこで電撃が与えられなくとも、ネズミは第1の箱にある車を廻すか、又は棒を押すことにより、第2の箱に至る通路を閉じている戸を開けて、第2の箱へ逃げることを学習する。そこで、第1の箱の刺激が、恐怖を生ずるために、第2の箱へ至る新しい学習をなしたと説明される。つまり、第1の箱から生ずる刺激は、以前の学習を通じて、恐怖が条件づけられたといえることができる。

ところが、この問題は Mowrer⁽²²⁾らの多くの研究によって、更に検討された。それは主として、彼の学習の二元論の立場からであった。学習を形成する第1の過程は Pavlov 流の条件反射であり、第2のものは Thorndike 流の試行錯誤学習である。この二種の過程は異質なものであり、両方が必要な

る。恐怖の二次条件づけは、条件づけられた恐怖の減退によって、獲得された恐怖による学習を説明することができるが、餌によって形成された二次強化においては、動因は条件づけられないために、減退すべき要求がなく、従って強化が存在しない。Hull の立場にあって、二次強化が著しく彼の理論の一貫性をさまたげているのはこの点である。この説明を可能にするのは快の条件づけ以外にはない。更に空腹時に餌を一口食べるということは、全体の空腹の強度、要求にとって、どれだけの要求の減退になるのであろうか。一般に成長したネズミの1日の必要量が20グラムとして、ゴールでその $\frac{1}{100}$ の餌を与えることによって学習は可能である。人間についても同様である。

1口のチョコレートのために、多の努力をする子供を見ることができる。これが、電撃から逃れた時のネズミの動因の減退と比較していかに小さな要求の減退の量であるか容易に理解されるであろう。

上記の論はS—R流の獲得動機形成の分析である。これによって、快及び不快の条件づけによって、更にその二次、三次の条件づけによって獲得動機が形成される根拠が示されたのである。我々の日常生活を支配する動機もこのようにして形成されたものであると考えることができる。

(3) 神経細胞集合, Hebb⁽¹⁵⁾ は知覚特に形態視の研究から出発して、その神経的対応として、細胞集合, Cell assembly を考えた。特に神経細胞の循環的結合が神経細胞集合の中にあり、これによって長時間の興奮の持続が保たれるとした。この仮説は動機づけが瞬間的なものでなく持続的な過程であるために特に興味がある。空腹についての彼の分析は、空腹にともなう食物の摂取(食物の視覚的刺激, におい, 味, 触覚刺激)が、細胞集合を食事活動を促進するように組織化するとしている。この分析は、単純な条件づけの分析を一層精密に組織的にするという意味で価値があるが、それ以上の意味があるとは思われない。

Olds⁽²⁵⁾ はこの Hebb の論を採用して、自己の報酬理論を打ち建てた。これ

は Hebb の論を動機づけの面に応用し、更に精密な分析を行ったという点で興味深いが、あまりに神経的説明が多いために、心理学の理論としてはいささか現実的でないといわねばならない。ただ、報酬の理論にとって重要な論点がある。恐怖、不快、つまり動因による動機づけの場合は、たえず求心の神経衝撃が与えられるために、動機づけの特徴である反応の持続という特性を比較的容易に説明できるのである。しかしながら、快の場合には、報酬を受けた瞬間にのみその感情的状態があるので、それが反応の持続を生ずると考えるのはやゝ困難である。快の条件刺激が与えられたとき動物は静止、弛緩の状態となって反応が停止してしまうのではないかとさえ考えられる。その時に何故目標追求的行動が生ずると説明できるのであろうか。飢や渴の場合は、これらが持続的刺激を生ずるがために、活動性の増大させ、反応を促進するが、好奇心や、非ホメオスタティックな動機づけのときには、目標との接触にのみ、快がある。しかもその快は、極端な興奮的な快を除いては、行動の制止として働くものであろう。この難点を、私は先に、快は接近的の反応を条件づけるとして解決したのであった。しかし、類推的に考えてみて、目標までの見通しのきかない迷路の中のネズミが目標に対して努力する状態や、幼児がお菓子をねだってあきらめない状態、成人が報酬のために働く状態は、快の条件刺激さえもあまり存在しない状態である。この様に目標や場面が変化する場合では、常に快の条件刺激が存在しているとは考えられないから、大脳において快の予期が持続して存在すると考えた方が説明がしやすい。この快の予期の持続は、Hebb の細胞集合や phase sequence によってよく説明されるであろう。

残された難点は、快の予期は快そのものとは異なって反応を促進するものでなければならないという点である。現象的にみて快の予期は活動性の増大を生ずる。餌をもらう前に動物は著しい活動性の増大を示す。⁽²⁰⁾人間についてもよく観察されるであろう。この点を明確にするためには、快の予期は生体を相対的不快な状態にすると仮定することがよい。人間では他人の快が自己

概念であるとされた。後に彼は、その自説を修正して、危険からの救助の外に Hope (希望) が条件づけられるとし、積極的追求的条件づけ、つまり快の条件づけを認めた。⁽²⁴⁾ また、彼は、本来動機づけは獲得されたものであるという立場を支持している。しかし、我々にとって重要な点は、彼が古典的条件づけと、問題解決的学習を区別したことである。Miller の恐怖の条件づけによる学習を分析すれば、第1の段階は、Mowrer にとって古典的条件づけであり、第1の箱の刺激特性は恐怖に条件づけられ、恐怖を生じ、それによって生じた恐怖が新しい学習をさせるのは、課題解決である。

条件づけられた不安とか恐怖が動因となれば、その説明の人間に対する適用範囲は誠に広い。Dollard 及び Miller ⁽¹¹⁾ の臨床面への適用は、この方向を示しているし、Brown は金銭に対する動機を条件づけられた不安によって分析している。⁽⁷⁾ また古く有名な Watson ⁽³⁴⁾ の児童における恐怖の条件づけも、獲得動因形成の例に外ならない。

我々は先に不快の条件づけについて述べたが、Mowrer の考え方を拡張すれば、不快の条件反射があると考えることができる。かくして、あらゆる不快は獲得され、獲得動因となるであろう。

しかし、空腹や渇のような不快は条件づけられ、獲得されるものであろうか。現在まで、このことは示されていない。著者の実験⁽³⁾においても、このことが確認される。先行訓練として直走路において次の条件で訓練される。H 群は空腹で目標箱で餌を得る。HT 群は空腹で同時に渇にされ目標箱で餌を与えられる。T 群は渇で水に対して走り、TH 群は渇で且つ空腹にされ水によって訓練される。その後 T 迷路に移され、片方の目標箱に餌、他方に水をおき、飢又は渇にされて訓練されると、HT 群及びH 群は餌に対して早く学習し、TH 群、T 群は水に対する学習が早い。HT とH、TH とTの間には差がない。かくしてHT 群とTH 群の付加された動因渇と飢はほとんど何の差も生ぜしめなかった。このことは、この種の動因が条件づけられないことを示している。飢や渇を条件づけることは難かしいことのようにである。飢

や渴も類推的にいっても、行動的な定義からいっても、不快であっても、何故動因の条件づけができないかについては、いくつかの説明が考えられる。第1に、それが著しい自律神経系、特に交感神経系の変化をともしないために、条件づけが顕著に生じないということ。また、渴や飢の発生が急激に生じないのも理由の一つにあげられるであろう。ここで、不快は主観的な分類よりも、交感神経系の興奮といった生理的基準によって分類することがより好ましいと思われる。この意味での不快の条件づけは、動物でも人間でも生じるであろうし、多くの場合獲得動因となり獲得動機を形成するであろう。

(2) 獲得誘因、この言葉は通常用いられない。意味は快の条件づけということである。最も困難な点は、古典的条件づけによって快が条件づけられるかどうかということである。Hull によって強化は要求の減退といわれて以来、⁽¹⁸⁾ 快の条件づけの概念は不必要になっていた。しかし、最近の多くの研究で、要求の減退なしに学習や反応の生起が生ずることが明らかになるにつれて、Mowrer の指摘した如く、条件づけによる Hope の形成、換言すれば快の条件づけが理論的に必要とされる様になった。なる程、食物は唾液反応の様な部分的な反応をともしなうけれども、交感神経系にみられる様な著しい全体的な副交感神経系の興奮を観察することができない。多くの場合反応の静止、弛緩である。しかし、Miller は既に弛緩の条件づけについて述べてい⁽²¹⁾る。人間の段階では、言語によって不快と同様に、快を連想することができるし、GSRにもこれが表われている。⁽³⁵⁾ また Olds の研究も快の条件づけ⁽²⁴⁾の可能性を示す一つ材料である。現在の段階では決定的ということはないけれども、快の条件づけを考えても不当ではないであろう。Olds は報酬の研究においてこの点を細かく検討しているが積極的に快の条件づけを述べるに至っていない。⁽²⁵⁾

ただ、飢や渴の様な不快の条件づけが困難であるとする、その要求減退によらない、餌や水の二次強化による学習を説明することは著しく困難であ

を相対的不快にすることが多いから、この説も必ずしも不当なものとはいえないであろう。他の解釈は、快の達成のためには多くの活動を必要とするし、快それ自体が興奮的な場合もあるということである。これは Hull が断片的予期的目標反応といったものであることは先に指摘しておいた。またこの点で Young の研究も忘れることはできない。⁽³⁶⁾

(4) Harlow の研究⁽¹⁴⁾

快、不快の条件づけによる獲得動機の説明は、単純に見えながら多くの問題を含んでいる。これに対して更に重要な攻撃を加えたのは、Harlow の猿の子供の母親に対する行動の実験的研究である。母親を子供が求めるのは授乳などの強化を通じて、母親に対する動機が獲得されたと考えられたのであるが、Harlow は次の様な実験を通じてこれを否定した。

猿の子供を出産直後母親から離し、むきだしの針金で作られた母猿模型と、布でおおわれた母猿模型をおいて育てた。子猿は、そのどちらによって授乳しようと、布の母親を好み、それに接触する時間が多く、おもちゃなどで恐怖を与えても、針金の母親には抱きつかず、主に布の母親にだきついたという。しかし、その後の犬の研究では、授乳された模型の方がよりよく好まれることも示されている。⁽²⁰⁾ 母子関係においては、あまりに食物などの要求のみを考えることは正しいことではないであろう。皮膚の接触より他の要因も検討されねばならない。

Harlow の研究は興味あるものであるが、獲得動機についての理論的問題を含んでいない。皮膚の接触が快を生ずると考えればよいからである。恐怖に際して布の母親に抱きつくのも、布の母親と共に過す時間が長いことから来ている。いつも時間を過している場所は安全な場所であり、恐怖に際してその部分にこだわるのは当然である。箱の中で飼われていないネズミが、恐怖に際して餌を求めて走り出すというのは馬鹿だたことであろう。恐怖と食欲は全く異質なものである。実際の母親はこの両方を、更にそれ以上の欲求を満足させるものである。

(5) 機能的自律。

本能説の衰退にともない、人間の行動を説明する方法として動因や動機
の概念が用いられて来た。とくに動機の獲得についていわれるのは、Murphy
の Canalization⁽²³⁾ と Allport の機能的自律⁽¹⁾ といわれるものである。機能的自
律についての論争は Stacey 及び DeMartino⁽³¹⁾ によってまとめられている。
機能的自律は、本能説が人間の基本的動機が限定されており、変化しないも
のであると考えるのに対し、生得なものにその基礎をおきながらも、学習を
通じて変化し、日常の具体的動機となり、本来の本能とは切りはなされてし
まい、自律的に機能的に独立してしまうという。船乗りは海をあこがれ、音
楽家は自分の楽器を大事にし、愛する。日本にも、住めば都といったことわ
ざもあるし、故郷の思い出はなつかしく、離れていれば、帰りたくなる。単
純な条件反射においては、強化が与えられなければ、二次強化力は消失して
しまうが、人間の場合には、1 回の経験が消えずにいつまでも残って行動を
動機づけることがあるという。

Rethlingshafer は⁽²⁶⁾、これについての簡単な証拠を示している。しかし、こ
れらの証拠は、機能的自律が条件づけで生ずるということを示しているよう
に思われる。

(6) 運河づけ。Murphy は Janet からこの言葉を採用した。一般的な動機
は経験を通じて特定の誘因によって他の誘因よりもより容易に満足される様
なことがある。チョコレートに親しんだ子供は、他のお菓子よりも、時には
他のいかなる食物よりもチョコレートを好む様になるだろう。Murphy はこ
のようにある動機が一定の通路によって、特によく満足されることを運河づ
けと呼んだのである。彼は、この外二三の実験的証拠を示している。これ
は、消去されない点で条件づけと異っているという。人間における伝記的、
精神分析的観察ではこの獲得された欲求は消去されないものであるとしてい
る。しかも運河づけは快である必要はなく、時には、恐ろしいものまでもが
運河づけられるという。機能的自律に類似した概念であるが、運河づけは、

それ自体自律的に作用しない。これは精神分析の Cathexis の概念に一致する。

いずれにせよ、条件づけは、1回だけの強化や、消去に耐えてなお働き続ける獲得動機を説明し得ない。1回だけの強化については imprinting として鳥の親母の過従行動について実証されたところであるが、⁽¹⁶⁾人間の水準でこれと同じ機制が働くとは断定できない。条件づけの説明が人間の動機の獲得にとって完全なものでないということは確かなことである。しかし、人間のように記憶能力の高い生体において、自然的な条件が、人間の基本的要求を著しく満足させ、極度の快を与えたり、逆に著しく不快な経験を生ずれば、1回だけで十分な、耐久性のある条件づけが生ずるという可能性を否定することはできない。統計的にいって、全獲得動機のうち何パーセントが、運河づけや Cathexis であるのであろうか。人間の性能から考えて当然の確率であるとするれば問題はない。一般にこのような科学的、統計的分析も必要と思われるし、精神分析や臨床家の発言がより客観的になるためには、この方向の研究が必要である。また、臨床心理学の分野でも、心理的動機が、生理的動因に基づいて学習されると考える人もある。⁽²⁷⁾動物や生理的実験の成果を直接人間の獲得動機の問題に結びつけるのは、簡単ではないとしても、不可能とは考えられない。

しかし、問題は更に複雑な面を持っている。それは、性格・社会心理学が自己、自我の概念を提出したことである。この自己に関して人間行動を分析すると、その説明は非常に容易になるし、理解しやすい。劣等感、適応機制、防衛機制、要求水準、態度、センチメントなど多くの問題がある。現実的な社会的動機、具体的な作業場面での動機は、人間の性格と切りはなすことのできないものを持っている。

References

- (1) Allport, G. W., The functional autonomy of motives. *Amer. Jour. Psychol.*, 1937, 50, 141~156.
- (2) Anderson, E. E., The externalization of drive. III Maze learning by non-rewarded and by satiated rats. *J. genet. Psychol.*, 1941, 59, 397~426.
- (3) 馬場道夫 動因弁別学習における動機づけの実験的研究, *心理学研究*, 昭和32年 28巻 141~148.
- (4) 馬場道夫—食欲と栄養— *栄養学雑誌* 昭和34年17巻 3~12.
- (5) 馬場道夫 動機理論の発達の再構成 (I) 小樽商科大学 *人文研究* 1963年1月 25輯 99~130.
- (6) Bindra, D., *Motivation: A Systematic Reinterpretation*. New York: Ronald Press, 1959.
- (7) Brown, J. C., Problems presented by the concept of acquired drive. In *Current Theory and Research in Motivation* (M. R. Jones, ed.). Lincoln: University of Nebraska Press, 1953.
- (8) Brown, J. S., *The Motivation of Behavior*. New York, McGraw-Hill, 1961.
- (9) Campbell, B. A., and Sheffield, F. D., Relation of random activity to food deprivation. *Jour. comp. physiol. Psychol.*, 1953, 46, 320~322.
- (10) Cowles, J. T. Food-tokens as incentives for learning by chimpanzees. *Comp. psychol. Monogr.*, 1937, 14, 1~96.
- (11) Dollard, J., and Miller, N. E., *Personality and Psychotherapy*. New York: McGraw-Hill, 1950.
- (12) Estes, W. K., Stimulus-response theory of drive. In *Nebraska Symposium on Motivation* (M. R. Jones, ed.) Lincoln: University of Nebraska Press, 1958.
- (13) Guthrie, E. R., *The Psychology of Learning*. Mass.: Peter Smith., 1960.
- (14) Harlow, H. F., and Zimmermann, R. R., Affectional responses in the infant monkey. *Science*, 1959, 130, 421~432.
- (15) Hebb, D. O., *The Organization of Behavior: A Neuropsychological Theory*. New York: John Wiley., 1949.
- (16) Hess, E. H., The relationship between imprinting and motivation. In *Nebraska Symposium on Motivation* (M. R. Jones, ed.) Lincoln: University of Nebraska Press, 1959.

- (17) Hilgard, E. R., *Theories of Learning*. 2nd Ed., New York : Appleton-Century., 1951, p. 58.
- (18) Hull. C. L., *Principles of Behavior*. New York : Appleton-Century., 1943.
- (19) Hull. C. L., *Essentials of Behavior*. New Haven : Yale University Press, 1951.
- (20) Igel, G. J., and Calvin, A. D., The development of affectional responses in the infant dogs. *Jour. comp. physiol. Psychol.*, 1960, 53, 302~305.
- (21) Miller, N. E., Learnable drives and rewards. Chapter 13 in *Handbook of Experimental Psychology* (S. S. Stevens, ed). New York : John Wiley., 1951.
- (22) Mowrer, O. H., *Learning Theory and Behavior*. New York : John Wiley., 1960.
- (23) Murphy, G., *Personality : a Biosocial Approach to Origins and Structure*. New York : Harper, 1947
- (24) Olds, J., Physiological mechanism of reward. In *Nebraska Symposium on Motivation*. (M. R. Jones, ed.) Lincoln : University of Nebraska Press, 1955.
- (25) Olds, J., *The Growth and Structure of Motives*. Illinois : The Free, Press, 1956.
- (26) Rethlingshafer, D., Experimental evidence for functional autonomy of motives. *Psychol. Rev.*, 1943, 50, 397~407.
- (27) Rotter, J. B., *Social Learning and Clinical Psychology*. New York : Prentice-Hall., 1954,
- (28) Seward, J. P., Secondary reinforcement as tertiary motivation : a revision of Hull's revision. *Psychol. Rev.*, 1950, 57, 362~374.
- (29) Seward, J. P., Experimental evidence for the motivating function of reward. *Psychol. Bull.*, 1951, 48, 97~129.
- (30) Spence, K. W., *Behavior Theory and Conditioning*. New Haven : Yale University Press, 1956.
- (31) Stacey, C. L., and DeMartino, M. F., (eds). *Understanding Human Motivation*. Cleveland : Howard Allen., 1958,
- (32) Thistlethwaite, D., A critical review of latent learning and related experiments. *Psychol. Bull.*, 1958.
- (33) Tolman, E. C., *Purposive Behavior in Animals and Men*. New York :

Appleton-Century., 1932.

- (34) Watson, J. B., Behaviorism. [那須聖訳, 人間は如何に行動するか。創元社 昭和17年 頁213~226]
- (35) Woodworth, R. S., and Schlosberg, H., Experimental Psychology. New York : Henry Holt., 1954, p. 153~157.
- (36) Young, P.T., Motivation and Emotion : A Survey of the Determinants of Human and Animal Activity. New York : John Wiley., 1961.